

●グローバル化時代の医療・検査事情 11

雲南の旅 その2 シャングリラ(香格里拉) 2010年



いわもと あいきち
岩本 愛吉
Aikichi IWAMOTO

シャングリラ (Shangri-La) は、英国の作家ジェームズ・ヒルトンの小説「失われた地平線」に出てくるユートピアの名称で、小説の設定ではチベットの未知の地域にあるという¹⁾。そのような理由からだろう、シャングリラ・ホテル&リゾートという会社が東京を含め世界各地に展開している高級ホテルの名称ともなっている。今回のテーマであるシャングリラ (香格里拉) は、中国雲南省北西の高地にある地名で、李洪雲南 CDC 部長が私の雲南 CDC ラウンドの最初の訪問先として選んでくれた場所である。チベットに近いがチベットの中ではない。

I. 楚雄 (ツーシュン)

広東 (グァンドン) 省広州 (グァンジョウ) 市で数日過ごした後、2010年7月31日に劉煥亮中山大学教授と広州市の白雲 (バイユン) 国際空港を離陸し、昆明市内からほど近い巫家壩 (ウジャバ) 国際空港に着陸した。ちなみに巫家壩国際空港は、2012年6月昆明東北部に巨大な長水 (チャンスイ) 国際空港が開港したため、現在は閉鎖されている。空港には趙尚徳 (ジャオ・シャンデ) 元雲南 CDC 所長、李洪 (リ・ホン) 部長、徐聞 (シュー・ウェン) 部長が出迎えてくれ、王 (ワン) さんの運転するビューイックで高速道路を西に向かった。雲南では、高速を降りれば危険な山岳路が多い。王さんは趙先生の信頼厚く、趙先生は地方に出かける時必ず王さんをドライバーとして指名する。1時間ほどで雲南省楚雄 (ツーシュン) 彝 (イ) 族自治州の県級市である楚雄市に到着した。

雲南 CDC の所長を 20 年も務めた趙尚徳先生は、



図1 2010年8月香格里拉への行程 (矢印)

★が宿泊した①楚雄 (7月31日)、②大理 (8月1日、5日)、③麗江 (8月2日)、④香格里拉 (8月3日、4日)。

雲南省のどこに行っても大変尊敬されている。各地の CDC 所員は、日本からの来客をもてなすというより趙先生に会いに来るのだ。趙先生に同行願った李洪部長の意図もそこにあったのだろう。早速宴会が始まった (写真1)。日本で中国の酒といえば、紹興酒を挙げる人が多い。紹興酒は紹興地域の酒であり、広大な中国各地で好んで飲まれるのは白酒 (パイチュウ) と総称される蒸留酒である。白酒と行っても濁り酒ではなく、ウォッカのような透明な酒だ。中国を代表するブランドには貴州省の茅台 (マオタイ) 酒、四川省の五糧液 (ウーリヤンイェ) などがある。人口の多い都市部では地元ブランドの白酒があるが、より田舎に行けばブランド名もない

東京大学名誉教授



写真1 楚雄 CDC スタッフとの宴会

(密造) 白酒が出てくる。アルコール度数は一般的に 40-50% というところだろう。焼酎よりははるかにアルコール濃度が高い。通常は小さいカップで飲むが、この夜は何とワイングラスだった。中国では飲み干したことを相手に見せるため、乾杯用のカップは通常透明なガラス製である。

II. 大理 (ダーリ)

8月1日、楚雄を出て高速道路を西に走り大理白(ペイ)族自治州に入った。大理自治州の人口は約350万で、15の少数民族が住み、漢族が55%、白族が30%を占めるという。中心部の大理市は人口約50万人、白族50%、漢族50%で構成されるが、実権を握っているのは白族で、漢族には農民が多く、漢族の方が HIV 感染も多いという。雲南省では年間約10,000人の HIV 感染が報告されるが、大理自治州で年間約900人、大理市で300人という。人口10万人あたり60人の頻度だから、日本の年間新規

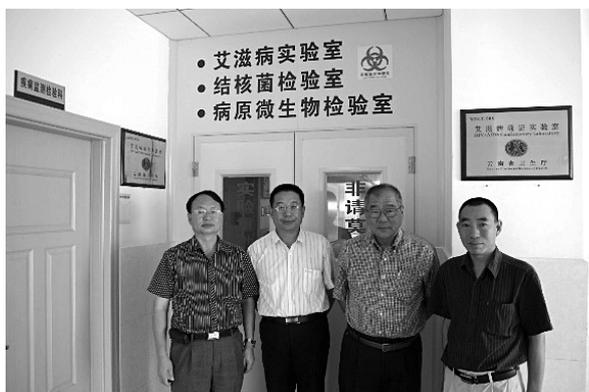


写真2 大理自治州 CDC の病原体検査室

報告数の50倍程度というところだろう。

我々は、陳大理自治州 CDC 所長の出迎えを受け、所内を見学し(写真2)、昼食に出かけた。ちょっと一杯ということであったが、白酒がコップで出てきた(写真3)。

午後には大理市 CDC を訪問した。外観は州レベルの CDC より立派そうだった(写真4)。大理市 CDC 所長の説明によれば、薬物使用と異性間性交渉による HIV 感染の拡大が問題だということだった。薬物使用者の中の HIV 有病率は約15%で、大理市 CDC ではメサドンを使ったヘロイン代替療法を行っており、毎日約100人が訪れるという。メサドンは無料ではなく、初回10元、その後通うと5元になるということだった。注射筒と注射針の無料交換、コンドームの無料配布もやっているという(写真5)。

大理近郊には洱海(アーハイ)と呼ばれる大きな湖がある。雲南省では、昆明近郊の滇池(ディエンツ)に次ぐ大きな湖である(写真6)。洱海をレマン湖に模して、雲南の人は大理を「東洋のジュネーブ」



写真3 大理市内での昼食



写真4 大理市 CDC 庁舎前にて



写真5 大理で無料配布されているコンドームを持つ趙先生と筆者

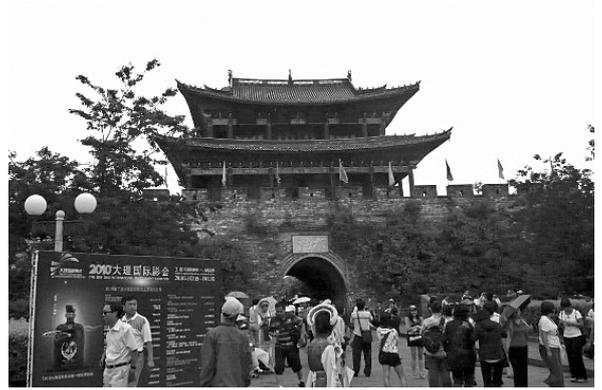


写真7 大理旧市街を囲む城門と城壁



写真6 アーハイ湖畔に立つ李洪部長と筆者



写真8 民族衣装を着た白族のパレード

と呼ぶらしい。大理の旧市街（大理古城）は城壁と立派な城門に守られ、かつての城壁都市としての面影を今に残している（写真7）。8月は夏祭りの時期だ。大理古城では民族衣装に身を包んだ白族がパレードしていた（写真8）。

Ⅲ. 麗江（リージャン）

8月2日、大理を発って北に向かった。3時間ほど走って鶴広で昼食を取り、明るいうちに麗江（リージャン）市に入った。麗江は世界遺産に指定されている美しい城壁都市（麗江古城）である（写真9）。外国人観光客も多く、居鳴鹿（ルーミンジュ）という素敵な四合院作りの旅館に投宿した（写真10）。四合院とは伝統的な中国の住宅様式で、矩形の中庭の周辺に居室が配置されている。夜は玉龍（ユーロン）納西（ナシ）族自治州 CDC の所長とスタッフがやってきて、宴会となった。今宵もビールとコップ酒で白酒をしこたま飲んだ。国内外から観光客の多

い麗江には、地方都市としては珍しいディスコがあった。我々おっさん数名は酔った勢いでダンスフロアに練り出し、若者にもまれながら恥ずかしげもなく踊り狂った。

麗江一体には納西族が多く、東巴（トンバ又はトンパ）と呼ばれる少数の司祭によって受け継がれてきた象形文字（東巴文字）が今に残る（写真11）²⁾。色彩豊かな文字で、色によって意味を変えられる唯一の文字という。

8月3日、玉龍納西族自治州 CDC を訪問し、エイズ検査室を見学した（写真12, 13）。この辺りは雲南省の中でも HIV 感染多発地帯ではないためか、エイズ検査室の内部は綺麗に整頓されており、活発に使用されている気配はなかった（写真14）。

中国ではエイズを艾滋病と表記する。愛滋病と表記するところだが、“愛”と病気が単純に結びつくのを避けるため、“艾”という漢字を当てたそう。エイズに対する偏見とコインの裏表のような話ではないか。艾滋は「アイジ」と発音する。筆者の名前



写真9 世界遺産麗江古城区



写真12 玉龍納西族自治県 CDC 外観

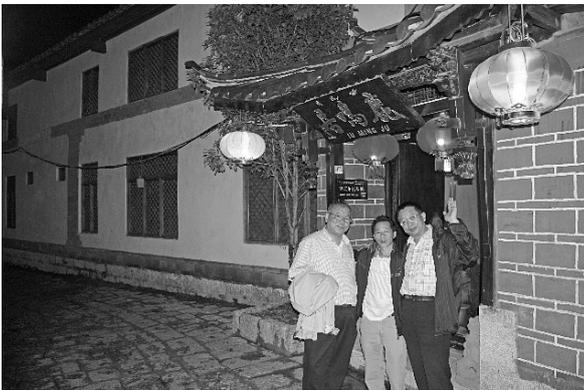
写真10 居鳴鹿前にて。李洪部長、
広州から駆けつけた劉さん、筆者。

写真13 玉龍 CDC のエイズ検査室

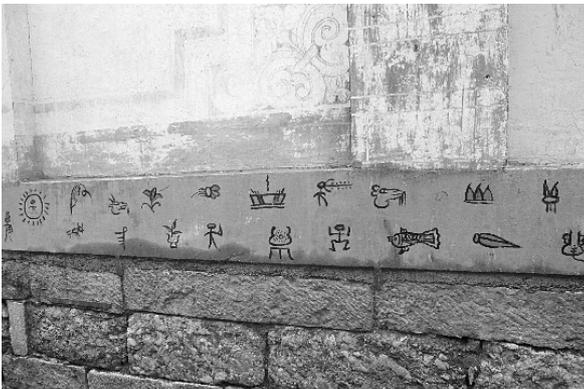


写真11 壁に書かれた東巴文字



写真14 玉龍 CDC エイズ検査室内部を見学する筆者

「岩本愛吉」は中国語読みで「イエンベン・アイジ」である。中国語の読み方を覚えてからは、名刺交換の際「イエンベン・アイジです」と挨拶してきたが、実は「岩本エイズです」と自己紹介しているに等しい。遠慮からか、中国本土で指摘されたことはないが、単刀直入な香港の友人が、「エイズを知ってる中国人は、お前の名前を一度聞いたら忘れない」と言っていた。

IV. 香格里拉

近隣の東河(シューヘー)という古い村(東河古鎮)のレストラン「納西人家」で昼食を取ることになった。所長はじめ玉龍 CDC のスタッフがやってきた。夜ほど深酒することはないが、昼でもコップ白酒になる。ドライバーとして一滴も酒を口にしない王さ

んを除くみんなが昼食後には酔っ払って、いよいよ香格里拉に向かった。酔いの勢いでみんな饒舌となり、中国語でガンガンまくし立てる。筆者一人、意味不明の大騒音に包まれて、強い眠気にもかかわらず眠れない。30分ほどすると彼等は疲れて眠りに落ちる。眠気も覚めてしまい、頭が興奮状態となった筆者一人が眠れないまま次の目的地に到着する。しばらくすると趙先生に会いたい人達がやってきて、また新たな宴会が始まるという毎日だ。趙先生曰わく、「国や雲南省政府はエイズ対策に多額の予算を投じている。問題は、かなりの割合が飲み食いに使われてしまうことだ。」「あーっ、我々にも責任の一端があるということじゃあないか！」

迪慶藏族(デチェン・チベット族)自治州は雲南省の最北西に位置し、チベットと接している³⁾。1市(香格里拉市)、1県(徳欽県:デチェン県)、1自治県(維西僥僳族自治州:ウイシー・リス族自治県)から成り、人口の33%をチベット族が占める。迪慶藏族自治州CDCその他の政府機関は香格里拉市の中心部にある。香格里拉が昔から桃源郷を自称していたわけではなく、もとは中国語表記で中甸、チベット語のデチェン方言で「シャンゴニラ」と発音したらしい³⁾。観光客誘致のため2001年に中甸県(シャンゴニラ)県をシャングリラ(香格里拉)県に改称、2014年に市制が施行され、香格里拉市となった。如何にも中国らしい話ではないか。

東河古鎮のレストラン「納西人家」を出て、香格里拉を目指す途中から少し動悸を感じた。標高2,000mを越えているだろうということだった。香格里拉は標高3,280m。香格里拉市に入ると、白いスカーフ(カター)を持った迪慶藏族自治州CDC



写真15 香格里拉市入り口でのカターによる歓迎

の所長とスタッフが出迎えてくれた。青海省でも経験したチベット文化圏の歓迎である(写真15)。その後はレストランに移って、早速歓迎の宴となった(写真16)。

8月4日朝、迪慶CDCの中堅スタッフがホテルに迎えに来てくれた。今日は東方にある国立公園まで半日ツアーに出かけるという。彼はホテル脇のコンビニに入って、数個の缶を抱えて出てきた。飲み物ではなく酸素の缶詰だった。今日の最高到達高度は海拔4,000mを越える、しかも公園内を約7km歩くのだという。公園は高原の湿原で、日本の尾瀬のようなイメージだろう。公園内に属都湖(シュドゥフー)と碧塔海(ビタハイ)という2つの湖がある。入り口で切符を買って、バスで属都湖のほとりまで移動し、そこから木道を歩く。高原の湿地を小川が流れ、放牧された牛や馬がはるか遠方に見える(写真17)。この辺りは揚子江の源流の一つなのだ。黄河の源流地域である青海省の青海湖を訪れた際には、木立も無く砂漠化が進行していることに



写真16 香格里拉での歓迎宴



写真17 香格里拉の湿原。揚子江の源流の一つ

驚いたが、揚子江の源流はまだ大丈夫そうだった⁴⁾。木道の傍には人なつっこいシマリスが生息し、地元の人達が収穫した野生の茸を即売していた。迪慶 CDC のスタッフが、一抱えもある大きな白い茸を買った。「猿の脳 (モンキー・ブレイン)」という茸だそうだ。静かな佇まいの碧塔湖を見て、バスに乗って公園の入り口に戻った (写真 18)。

午後には迪慶藏族自治州 CDC を訪問し、所長達とディスカッションした (写真 19)。この辺りは雲南省でもまだ HIV 感染者の少ない地域だ。CDC には 400 検体くらいの検体を一度に処理できるという自動化抗体測定装置が納入されていたが、「未使用」の札が乗っかっていた (写真 20)。検査に訪れる人も少ないという。高速大量処理可能な自動化装置よりも、一本ずつ検体検査のできる人員が欲しいところだが、装置は政府から一律に支給されたものらしい。見学後は火鍋料理とモンキー・ブレインを食し

た後、チベット民族舞踊を楽しんだ (写真 21)。

V. 松贊林寺と虎跳峡

8月5日、チベット仏教の寺として雲南最大という松贊林寺 (ソンツェリンシ) を訪問した。ラサのポタラ宮を模して 1680 年頃創建されたという壮大な寺院だが、中央の主たる寺院が再建中だった。お寺に参った後、帰路についた。急峻なつづら折れの山岳路をガンガン下っていくと、麗江市との境で長江 (チャンチアン) の上流、金沙江 (チンシャーチアン) とぶつかった。長江は日本では揚子江と呼ばれる中国の大河だが、揚子江 (ヤンツーチアン) は主に下流域を指し、上流域を金沙江、全体を長江というらしい。支流と合流した金沙江が山を切り裂き、虎跳峡 (フーティアオシア) と呼ばれる深い峡谷を形成した。虎跳峡が迪慶藏族自治州・香格里拉市と麗江市・玉龍



写真 18 碧塔湖

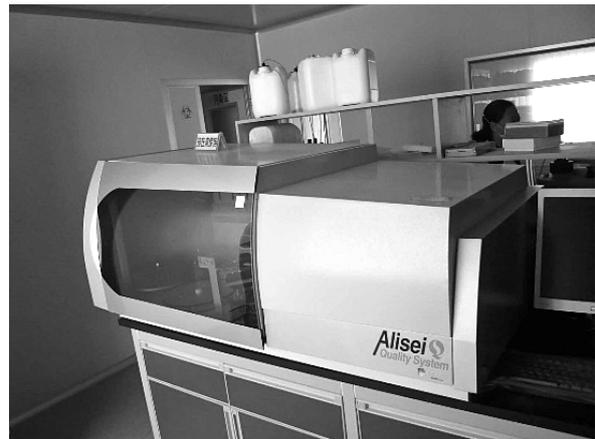


写真 20 自動化抗体測定装置



写真 19 迪慶藏族自治州 CDC の外観



写真 21 香格里拉の火鍋料理



写真 22 金沙江と虎跳峡、雲のかかった玉龍雪山

納西族自治県の境界となっている（写真 22）。虎跳峡の両側には哈巴雪山（ハバシュエシヤン：5,396m）と玉龍雪山（ユーロンシュエシヤン：5,596m）がそびえるはずだが、雲がかかって壮麗な山を拝むことはできなかった。

雲南省の隅々まで走破しつくした趙先生と旅すると、どんな山の中に分け入っても美味しいレストランに出会う。趙先生はそのような道を選んでいるのかもしれない。虎跳峡の道ばたにもイキなレストランがあった。彼等はキッチンに入って、野菜や魚や肉を細かく注文する（写真 23）。この日のメインコースはチキンだった。この時の私はまだ初めてで、少し調理に時間がかかりすぎではないかとつぶやいたところ、「今絞めているところだから」という回答だった。生きた地鶏をその場で絞めて、羽をむしり、大きな包丁で骨ごと小さくぶった切り、野菜や香辛料を使って大きな中華鍋で炒める。雲南では行く先々で、色や姿の違う鶏がレストランの回りで餌をついばんでいる。しっかりした肉を持つ地鶏なのだ。昼食後一本道をさらに下り、大理の傍の大理地熱国に宿泊した。中国では珍しい温泉だったが暗闇の中で、どれほどお湯がきれいかわからなかった。12時になるとお湯を止められるというので、慌ててシャワーに入ってからベッドに入った。

8月6日、出発地の昆明に戻った（写真 24）。約2,000kmの行程を一人で運転した王さんは素晴らしいドライバーだ。



写真 23 虎跳峡のレストランにて細かい指示を出す李洪部長



写真 24 昆明に戻った趙先生と筆者

8月7日、昆明から広州に飛び、劉教授の学生達と夕食をともにし、8日に帰国した。

文 献

- 1) <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%83%B3%E3%82%B0%E3%83%AA%E3%83%A9>。アクセス(2017年3月7日)。
- 2) <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8A%E3%82%B7%E6%97%8F>。アクセス(2017年3月7日)。
- 3) <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%87%E3%83%81%E3%82%A7%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%83%81%E3%83%99%E3%83%83%E3%83%88%E6%97%8F%E8%87%AA%E6%B2%BB%E5%B7%9E#.E8.A1.8C.E6.94.BFE5.8C.BA.E5.9F.9F>。アクセス(2017年3月7日)
- 4) 岩本愛吉。「H5N1高病原性鳥インフルエンザと青海湖」。グローバル化時代の医療・検査事情5。モダンメディア第62巻6号。2016年。